

音色に着目したアンサンブル創り
—4年生の取り組みにおける探究活動と聴取活動による影響について—

津田 奈保子*

大阪信愛学院短期大学

Human and Environment Vol. 12 (2019)

Creating an Ensemble that Focuses on Sound
—Effects of Exploration and Listening Activities on 4th Graders' Efforts—

Nahoko Tsuda

Osaka Shin-Ai College, Japan

Abstract. In this study, the author had 4th graders engage in the exploration of musical instruments, examining the process of creating sounds through listening to those produced by other groups, and studying the effects of their exploration and listening on their own activities. Insufficient research on tone has been conducted to date via the ensemble. As the first step in the process, they set aside time for exploration as "time for trying", and start to create sounds on becoming aware that a variety of sounds can be produced by a single instrument. Then, they appreciate and listen to the sounds made by other children, focus on their own sounds, and search for the sounds that they want to produce. Meanwhile, skills are acquired by means of discovering and producing various sounds. While interacting with the sounds made by others, they find out what their own sounds should be, and become able to produce sounds whilst acquiring both an improved understanding of the ensemble itself and a greater sense of responsibility regarding their role within it.

Keywords: sounds, ensembles, instrumental music, exploration, listening

1. はじめに

近年始まった音色研究の中で、阪井[1]は「音色の感受力をどう育てるか」に焦点を絞り、周波数解析により、児童らに音色を目で見える形で示し、興味を高める授業展開がされている。音の微妙な違いを聞き分け

る力と、音の違いを表現する力の育成について、まだ十分な教育方法は確立していないように思われるが、阪井の研究からも、興味を持つことから変化を楽しみだすのではないかと仮説を立てることできる。

学童期の打楽器による器楽において音色に着目した研究はほとんどない。現実問題として、楽譜の難易度が高い曲をさせれば、楽譜通り正しいリズムやメロディーを演奏するなどに着目することとなり、読譜力の弱い児童や、音楽経験の浅い児童は、再現することに終始しがちである。再現することのみに終始し、児童が音に着目をして演奏することはかなり困難となる。しかしその児童なりの思いを引きだし、学習指導要領

*大阪信愛学院短期大学子ども教育学科
〒536-8585 大阪市城東区古市 2-7-30
E-mail: n-tsuda@osaka-shinai.ac.jp

受付：2019年9月18日 受理：2019年9月30日

©2019 大阪信愛学院短期大学

の求める思考力・判断力・表現力を求めるのならば、試行錯誤が求められる音色に焦点を絞ることは重要である。

また音色に着目した理由として、音色はどの児童にも与えられるその人の表現であるからである。つまり巧緻性の問題があると途端に音楽に参加する意欲をなくす児童や、音を追うことで必死になる児童は、その人の心を表す表現手段を失いかねない。従って児童なりの表現を重視し、指導要領の対話力を重視するならば、リズムアンサンブルが適していると判断した。

有本[2]の研究の中で、器楽への時間配分は、4年生の40%が一番多い。しかし、単一楽器で同じリズムや旋律を一斉に合わせる活動が器楽全体の43%をしめ、複数楽器によるグループアンサンブルは5%にとどまっている。つまり単一楽器とは、おそらくリコーダーなどであり、器楽の時間配分が40%と言っても、打楽器を使ってアンサンブルなどをする例はまだ稀であるといえよう。

しかも楽器の音色にこだわった器楽教育はまだまだ研究段階であり、現場ではそこまで意識されていないように思われる。山内[3]は表現の工夫を、ピアノやフォルテ、クレッシェンドなどを一つの意味だけでとらえた工夫しかしていないと述べ、今川は、「パターン化の促進や要素化、概念化を批判することは簡単」であるが、「感じ方や表現の仕方が実に多様にあること」を発信する必要性を述べている。また表現を深める際に、思いや意図が先行すべきと、現場では思われがちであるが、『『やっているうちにできる』といったものが結構子どもにとっては、大事』[4]である一面を考えると、たくさん楽器に触れ、自分たちの音を十分に聴き、感じる時間も大切である。つまり最初はあまり何も考えていなかったとしても何度も繰り返しているうちに、自分たちの音を聴き、判断し、もっと良くなるように意図をもって、音楽を構成しだすのだと仮定できる。もしもまだ演奏するのが精いっぱい時期であれば、周りの音を聴いたり、バランスを聴いたり、自分の音を聴くことさえままならない。つまり、音にこだわるアンサンブルをするためには、子どもが〈やってみる時間〉を確保し、思考先行型ではなく、〈まずは身体を動かす時間〉というものが保証されなくてはならない。

本稿において、小学校の4年生対象に楽器探究に取り組ませ、他グループの活動を聴取する活動を通じて、自らの音を工夫する過程を考察し、探究活動や聴取活動がアンサンブル活動に与える影響について研究した。やってみる時間を十分に確保し、一つ一つの楽器の探索を深めさせる。その上で他グループの活動を聴取する活動を通して、自らの音を工夫する過程を考察する。

有本は器楽について系統指導の前提として、楽器の表現力のすばらしさを先生が持っている必要があると述べる[5]。つまり、楽器のもつ表現力の豊かさに気付

くことで、子どもはその魅力にひかれていくのだ。したがって、器楽表現の面白さに気付くためには、楽器の持つ表現力をそれまでの授業の中でもたくさん活動に入れ、たくさん示していくことが必要である。本研究を行うために音楽科の授業にて1学期にも十分な楽器体験を行ってから研究に入った。

2. 研究方法

2.1. 研究対象

S小学校4年生、2クラス計33人(3人組×7、4人組×3グループ)

2.2. 研究方法

小学校4年生に16小節のリズムアンサンブル創作を行い、探索と聴取活動を通して楽器選択と発音方法の変容について考察する。変容の区切りは以下の時とする。

- ① アンサンブルの楽器を選ぶ時。
- ② 楽器探索を行いながら活動中の楽器選択の変化。
- ③ 小太鼓の探索をグループで行い、一つの楽器から多種の音が出せることを経験後の楽器選択・発音方法の変化。
- ④ 中間発表をし、他グループの鑑賞も行う中で、自らのグループの楽器の音について思考し、楽器選択・発音方法の変化。

記録:ビデオで撮影し、記録をする。ビデオは固定で撮影し、他の一人の研究者とともに二人でビデオ視聴する。

注目する音:音の3要素である強弱、高低、音色のうちの音色に着目する。まず楽器が持つ多様な音色に着目できているのか確認する。従って以下の4点に着目して観察する。

- ① アンサンブルで選ぶ楽器の組み合わせ
- ② 使用するばち
- ③ 叩く場所
- ④ 音に関する子どもの工夫

2.4. 研究計画

① 2学期:2018年11-12月 音楽科4時間

16小節のリズムアンサンブルを作成し、3・4種の楽器を選択する。小太鼓を取り上げ、一つの楽器から多種の音を創れる体験をする。中間発表として他グループを鑑賞し、音の工夫を受け取り、フィードバックさせる。

② 3学期:2019年2月 音楽科4時間

2学期のリズム創作を他グループの感想を元に振り返り、打ち方、ばち、打つ場所を修正する。この段階では、楽器の変更は不可とし、2学期に最終選んだ楽器を使っての工夫をさせる。また曲の全体像を考え、強弱・

アクセント等をつける。

2.5. 実践の内容

- ① 言葉を使用してアンサンブルを作成する、3・4人の重なりや、音の流し打ちや、カノンのようにずらして打つことなど様々な手法は、1学期の取り組みが生きるようにと1学期を思い出させ、確認事項として取り上げる。その後、各グループの楽譜の工夫が生きる楽器を選ぶことができるよう、多種の楽器を手の届くところに配置し、小物楽器は取り出しやすいように机の上に並べておく。
- ② 3・4つの楽器を何にするかで響きが変わること、に気付くよう、様々な組み合わせを試行させる。「まずは鳴らしてみる」が基本である。手あたり次第鳴らしながら、音を試す。音をしっかりと味わうように聞くのではなく、〈鳴らす〉が主活動となっても注意はしない。ただし、やみくもに大きな音を鳴らしているだけの時には、他児に影響があることから、もう少し小さな音でも聞こえることを伝えるものの、今川の言う、「やっているうちにできる」を信じて待つ活動である。途中で、楽器の材質の話をし、同じ材質の楽器を使用、材質が異なる物を使用、似た音色のものを使用するなど試行する。楽器には、木、金属、皮またその組み合わせで音ができていることを伝える。
- ③ 小太鼓を題材に、何種類の音が出せるのかをグループで出し合う。音の要素のうち、音色のみに焦点をあてる。小太鼓一つから音の多様性があることに気付くことがねらいである。またばちを変えるなどということも可能なように、多種類のばちを用意する。音の3要素（強弱、高低、音色）について話をし、本時には、音色に着目して音を見つけるように伝える。組み合わせで、例えば鼓面に鈴を置いて小太鼓を叩くと、小太鼓と鈴の音がしたり、トライアングルを置いてすると、音が響かず、重い音になったり、と変化することをつかむよう、小物楽器も取りそろえる。
- ④ 中間発表をする。他グループの演奏を聞くことで、どの楽器の組み合わせが面白いのか、どの楽器の組み合わせは、問題があるのかを考察し、他グループに対し、よかったと感じたところと、改善点を書きだす。それを各グループに渡し再考させる。楽器の組み合わせ、グループ内でのバランス、音色に着目するように伝える。

3. 結果と考察

3.1. 授業からの考察

- ① アンサンブルの楽器選択、第1回目。

事例1

ドラムセットの大太鼓を足で打つことに楽しさを見出す児童がいる。足で力任せに叩いている。他児と協調する姿もなく、足で打つことに喜びを見出す。足なので当然細かいリズムは遅れる。その点を指摘してみるがそれでも「これでいい」と足で打ち続ける。他の児童との関わりは薄い。

事例1のように、ほとんどの児童は、まずは自分がやりたい楽器を選ぶ。周りとの音のバランスも関係なく選択をする傾向にあり、音色に対しても無頓着であるというのが現状である。人のアドバイスに対しても受け入れる準備もなく、自分の欲求を満たすための時間であると言える。

- ② 材質を意識して選択する。

事例2

ティンパニ2台と小太鼓を選んでいたチームがある。しかし同材質の太鼓系ばかりでは変化がないと感じたこのグループは、ティンパニ、小太鼓、ハイハットシンバルの3つを選んだ。つまり1枚皮・2枚皮・金属楽器の3つを選び、音の変化が生じた。しかし、楽器はいろいろ試してみるものの、ばちに関しては、無頓着で、ティンパニもその周りにたまたまあるばちを使い、中太鼓のばちやラバーマレットなどを使用し、ティンパニ本来の深みのある音は出ていないし、小太鼓もマレットなどで打つため、細かい音符はクリアにならない。

児童にとって、楽器を変えるということは、音色を変える最大の方法である。したがって楽器を何度もとりかえて試すことがほとんどである。小学校にあるありとあらゆる楽器が登場するほどに楽器の探索活動は進む。しかし楽器の変化には着目するようになるものの、一つの楽器の叩く場所や、楽器を叩く物に対する執着はない。小太鼓をマレットで叩いた場合の音を、児童が希望して叩いているのではなく、たまたま児童の近くに存在していたばちを使ったに過ぎない。このように、楽器の音を漠然と聞いてはいるが、その中の繊細な音については着目できていないことの表れである。1つの楽器からでも多種の音を作り上げることができる音色に対してまだ十分に着目できていないと思われる。

- ③ 一つの楽器から音の多様性を考える。

事例3

「小太鼓でいくつの音が出せるでしょう」と課題を出す。グループごとに音をいくつも書き出す。ばち以外の、鉛筆、手、マラカス、つめ、消しゴム、トライアングルのばち、クラブス、鈴、カステネット、カウベル、髪の毛、制服、ゴムで叩くなど、10分間で20もの方法を見出すグループも出現する。

事例4

小太鼓を打つ物を、色々変えるグループは多いが、1グループは叩く、擦るなどの奏法を変化させる。真ん中を叩く、端を叩く、ふちを叩くなどの場所を変えるなど 16 種類の音を書き出す。

事例5

小太鼓の上に様々なものを乗せて、音の組み合わせにおいて工夫をする。クラベス、カウベル、タンバリン、トライアングル、鈴、マラカス、を乗せて叩く。

小太鼓を例にとり、各グループに一つの小太鼓（一部中太鼓）を渡し、音の変化を試行させる。ここで、児童は4つの方法を見出すことになる。

- 1 ばちを変化させる。つまり、木のばちや、ゴムのばち、フェルトを巻いたばち、毛糸を巻いたばちなど、叩くものを変えると音が変わるということに気付く。
- 2 奏法を変える。叩くだけではなく、擦るといふ奏法もできる。その他にも、はじく、吹くなども考えられるがそれは登場しなかった。
- 3 叩く場所を変える。太鼓の端を叩く、中央を叩く、杵を叩く、サイドを叩くなどにより音が変化することに気付く。
- 4 楽器を組み合わせる。つまり、小太鼓の鼓面に鈴を乗せる、タンブリンを乗せるなどの音の組み合わせを導き出した。太鼓の音と鈴の音などが混ざり合うことを面白いと感じ、工夫する。

これまでは自分たちが作成したリズムをグループ全員が間違わずに打てるのか、また揃えることができるかに意識をして練習していた。また、楽器に関しては、各自が好きなものを選んで演奏してきた。しかし、この小太鼓をめぐる音の工夫をテーマにして以来、児童の練習の思考性・方向性が変化する。

つまり、音は組み合わせにより多種多様存在するが、自分たちが欲しい音を探すことが大切であることに気付く。そもそも音は数えられるものではない。したがって著者が問題提議した「いくつ音が見つけれられるか」という問題は愚問である。しかしこれによって、児童は音を工夫する術を見つけることになる。この取り組みではただ他のグループよりたくさん見つけたいという思いで工夫を試みているが工夫すれば多種の音が見つけれられることに気付き、この活動後は、自らのアンサンブル活動でも、音に工夫がみられるようになる。

④他グループのアンサンブルを聴取して、再試行する。

事例6 A2グループの取り組み

- 1 サスペンディッドシンバル、小太鼓、ハイハットシンバルをただ叩くことから始める。
- 2 小太鼓による音探しの取り組みの後、小太鼓に鈴を一つ乗せるか、鈴を小太鼓の面全体に置く、一部に

置くなどを試す。ばちの種類・叩く場所も試す。サスペンディッドシンバル、小太鼓、ハイハットシンバルの上にモンキータンブリンを乗せるなどを試す。

- 3 しかし、他児からの指摘で「似たような音が多すぎてリズムがわかりづらい」とアドバイスをもらう。その結果、モンキータンブリンを乗せるのをやめた。その代わりに、サスペンディッドシンバルを、毛糸を使う時と、木のばちを使う時とで分け、小太鼓は端を叩く時と真ん中を叩く時を使い分けた。叩く場所が変わることはこのような音色の変化だけではなく、強弱にも影響があることを知り、様々変化をつける。

最初に、好きな楽器を選択していた時とは異なり、客観的に聞いたアドバイスと、他グループの鑑賞により、先述したような4つの変化の方法を駆使するようになる。同時に、その4つの方法を駆使するために、変化がつけやすいものを意識して選ぶようになる。またこの最終段階に入ると、音色だけではなく、アンサンブルとして必要な他の児童との音のバランス、強弱にも着目ができるようになってくる。

楽器の組み合わせに対して、「似ている音が多かったが違う音にした方がよい」というように、異なる音が合わさることでより面白いと感じる様子が多々見られた。また同じ音で隠れてしまうのではなく、すべての音が存在することに価値を見出し、「全部の音が聞こえるようにグループの子の音も聞く」ように他グループにアドバイスしている。つまり似たような楽器ばかりを使用しては、合わせる面白さが半減すると考えているのである。似たような音をあわせるのであれば、順に叩くとか、合間に叩くなど、聴こえるように工夫する必要があるのかもしれないが、子どもたちが創ったリズムアンサンブルは楽器を何にするかは後から考えているため、そこには考えが及んでいない。しかし、アンサンブルの本質である、「皆で合わせる」ということ、つまり、誰が主人公というのではなく皆の音が重要であり、聴こえなくてよい音はないということは感じられているようである。

事例8

児童による他グループへのアドバイスの中に「クラベスがもっと響くといい」というものがあり、クラベスの鳴らし方を工夫しているグループもあった。またトライアングルを使用した児童は振り返りにて「叩く場所を工夫した」と述べ、同じ音を出すために、同じ場所を打つように工夫していた。

音を変えるために叩く場所を変えるという児童もいる反面、トライアングルの例のように同じ音を出すための工夫も現れる。つまり、ただ叩けばよいのではなく、同じ音を欲し、工夫をしたのだ。またクラベスの例でも、ただ鳴らせばよいのではなく、より良い音を求めて工夫するなど、音を聴きとっている児童も見受け

られたことを意味している。つまり音の要素のうち、強弱、長短は理解されやすいが、音色に関しては、主観が大きな役割を果たす。データで音色を測るのではなく、音楽の中で音色を工夫するということは、演奏者の好み、つまり児童の中に「いい音」というイメージが生まれたことを意味する。

3.2. 学習指導要領との関係において

打楽器アンサンブル創作による楽器探索活動により、どのようにしたら音が変わるのか、どのようにしたら強弱が出せるのか、どのようにしたらよい音が出せるのかを考え、腕の使い方や、打ち方などにも気づき始めた。それはまさに器楽の奏法であり、演奏技術に通ずるものである。つまり、『新学習指導要領』で言う、「基礎的・基本的な知識及び技能の習得に課題」[6]に向き合っているといえる。

またある児童は、「好きな音を出すようにした。」「どうしたら面白い音が出せるかを考える。」「きれいな音を出そうとすること。」「ばちによって変わるから自分に合いそうなものを選ぶ。」などと述べている。つまり、音に正解・不正解はなく、児童自らが音に向かい、自分の好みの音や自分が面白いと思う音に向き合う様子が見られる。音楽は教師からの指示のもとに発音するのではなく、音楽を通して自分の好みの音は何か、どんな音を出したいのか、どんな音が面白いと思うのかなどを考えることが重要であり、自己と向き合っていることがわかる。これは、『新学習指導要領』の「児童生徒に目指す資質・能力を育むために『主体的な学び』」がなされたことを意味する。

またある児童は、アンサンブルの大事なことは「一人でも休んだらアンサンブルにならない。」「いろんな人の音もきくこと。一人の思いのままに叩かないこと。」「一人が間違うとみんな崩れてしまう。」と記入している。対話的な学びとは、教師と児童、児童と児童など考えられるが、音楽ならではの取り組みとして、他児の音と自分の音を対話させているのだ。一人でするのではなく、他児と音を通して対話をし、アンサンブルにすることで、一人一人の責任感と、他者との協働、また他者との駆け引きなどをしながら人との関わりを学んでいるのがわかる。アンサンブルという一つの活動の中で、探究を十分に与えながら音楽を創っていくと、自然と音を聴き、他者との協働をし、音楽的にも人間的にも成長する姿が垣間見られた。アンサンブルという活動を通して、「対話的で深い学び」となる。人間的な育ちを我々は一番に重きを置くべきではあるが、「深い学びの鍵として『見方・考え方』を働かせることが重要」[7]になる。今回は〈音色〉に着目することで実現できたのではないかと考えられる。音色に着目したことで、他グループの鑑賞においても音聴取をしようとしており、またグループ内でも音色の重なりなどを聴

取し、音での対話が存在したと考えられる。

また児童にとってまずは〈やってみる〉の時間は重要である。最初はリズムに追われ、音色に焦点が行かない児童も、2学期、3学期と同様の取り組みをすることで、試行錯誤を始めていく。初めから高度なことを望むのではなく、まずはやってみる時間を十分に確保することで自ら出す音色や、他児との音色の重なりにも気付く。また小太鼓の音を工夫するゲーム的な取り組みから、一つの楽器からたくさんの音がなることを楽しんだ児童は、すぐに自分たちのアンサンブルでも生かし始める。これも、最初からバランスや、音色の重なり面の面白さに話を向けるのではなく、まずは〈やってみる〉を十分に確保することで、自ら様々な組み合わせを試す。この色々を試すこと、実際に頭だけではなく、やってみることで、理屈だけではない、これが面白いと思う感性が働く。実際にやるということは、やりながら試しながら「どれが面白いと思うか」という問題を自らにつきつけることになる。これが創意工夫となる。

ペインターは「創造性の特徴は、ほかの思考方法以上に好みと判断が要求される」[8]と述べ、音の創造は、偶然の代物などでは創れるものではなく、思考することだけでなく、まずはやってみる試行で生まれ、音を聴き、自分の好みは何かを考え、自己に向き合う高尚な行為であるといえよう。やってみる時間を十分に確保し、自ら出す音を試しながら試行錯誤することで、音色に興味関心を示していた。また他児の演奏を聴くことで、直感的に感じるバランスの良し悪しや、音色の面白さ、重なりを感じることで、自らの音に興味関心が向くことが感じられた。ただし、ただやみくもにやらせるだけでは音に着目するかは不確定である。したがって、今回の事例のように小太鼓に着目して、いくつの音が出せるか問いかけるなど、工夫する機会を与えることや、他グループの聴取など、客観的に活動を観察することができる機会を設けることが重要である。そうすることで、自分たちの発する音に対して好みの形成や判断が可能となる。

児童の最後の振り返りの中でも同様の特徴がいくつか見いだせた。

- 1 基礎的・基本的な奏法、技能の習得を、探究をする中で見つけている
- 2 やってみる時間の確保で、自分の音に向き合い、自らの欲する音を探しだす。
- 3 他者の音と対話し、人と協働する中で、自らのありかたを見つけ、責任感を見出し、自ら出す音に対してもよく聴取している。

この活動を通して言えることは、自由に触る時間、まずはやってみる時間から始め、一つの楽器から多くの音が鳴ることを学んだ子どもたちは、自ら音に対して気づき、感じ工夫していく。そして、他グループの鑑

賞を通して、自らの音、自らのグループの音を、他グループの感想を軸として、聴くようになっていく。

振り返ると真にこれらは、新学習指導要領の方向性であることがわかる。つまり、あまりまだ十分に組み込まれていないアンサンブル創作ではあるが、得た知識を次の活動に取り組む力が試され、また他者とのかわりの中で自分の位置づけを見出すなど教育的価値は十分認められる。リズムができる・できないという問題や、教師の指導に従って単に音楽が上手に演奏できるかといった指導とは異なり、自らが主体的に音を通しての対話を行う中で、活動することができる点でよい活動だと言える。

5. 結語

小学校教育の中で、唱歌と同様に重要な学習内容である器楽活動は、子どもたちがとても喜ぶ楽しい活動である。とりわけ、様々な楽器、特に打楽器は、リコーダーのような指先を使用し巧緻性が問われるものとは対照的で、一見巧緻性が求められることもなく、誰でも音が鳴らせる楽器であることから、他の楽器、つまりリコーダーや鍵盤ハーモニカに苦手意識がある子どもにも人気がある活動である。しかし反面、嬉しいがために、ただ叩くことで終始し、また誰でも鳴らせることから、音に執着がされにくい分野でもあると思われる。

音色に着目した器楽教育を、リズム楽器だけではなく、メロディーやハーモニーといった音楽の他の要素にも派生して思考することが将来的には望ましい。しかし巧緻性の問題と、またメロディーが間違っただけであると音楽が成立しなくなるということ、また正しい音を出さなくてはハーモニーも生まれないことを考えると、音色に焦点を絞って取り組むにはリズム楽器が望ましいと考える。リズム楽器でリズムのみに着目しながら音に変化をつけることが、音楽創造、特に音創造の入り口としてはよいと考える。またその中でも、他者の音を聴く活動が増加することを考えるとリズムアンサンブルがよいと考える。

しかしリズムアンサンブルでは、曲想と音楽の構造などとの関わりについて気付いたり、表現したりすることは困難である。前述したように、音楽の3要素のうち、メロディーとハーモニーを取り入れた場合、同じ打つという奏法を基調にしたとしても、音色に着目することが困難となるかもしれない。しかしながら指導要領にもあるように、曲想と音楽の構造などとの関わりで気付きながら、音色や響きに気を付けて旋律楽器も演奏することができるよう導くことがその後の音楽人生がより豊かになると考える。従って旋律楽器による音色教育についても今後研究を進めたい。

文献

- [1] 阪井恵:指導内容としての「音色」に関する研究—倍音構造の経時変化、ノイズ成分、共鳴等の概念を導入して—: 学校音楽教育研究 18, 122-123 (2014)
- [2] 有本真紀他:義務教育段階の器楽教育に関する調査. 日本音楽教育実践ジャーナル 7(2), p.48 (2010)
- [3] 今川恭子他:音楽科の評価—測ってきた音楽・測ってこなかった音楽. 日本音楽教育実践ジャーナル 10(1), p.13 (2012)
- [4] 前掲書 p.14
- [5] 村尾忠廣:『器楽教育の過去・現在・未来』を語る. 日本音楽教育実践ジャーナル 7(2), p.66 (2010)
- [6] 文部科学省:小学校学習指導要領解説. 平成 29 年告示 音楽編, p.4 (2018)
- [7] 文部科学省:小学校学習指導要領解説 総則編. 平成 29 年告示, p.4 (2018)
- [8] ジョン・ペインター著(坪能由紀子訳):音楽を創る可能性. 音楽之友社, p.11 (1994)

音色に着目したアンサンブル創り

—4年生の取り組みにおける探究活動と聴取活動による影響について—

津田 奈保子

小学校の4年生対象に楽器探究に取り組みせ、他グループの活動を聴取する活動を通じて、自らの音を工夫する過程を考察し、探究活動や聴取活動が活動に与える影響について研究した。アンサンブルを通して音色に着目する研究はまだ十分になされていない。まずは〈やってみる時間〉として探究の時間を確保し、一つの楽器から多種の音が発音されることに気付くと音を工夫し始める。他児の音を鑑賞し聴取することで、自らの音に向き合い、欲する音を探究する。また様々な音を見つけ、音を出す工夫の中で技能の習得も行われている。他者の音と対話する中で、自分の音のあり方を見つけ、アンサンブルの中でのあり方や責任感にも気づきながら音を出すようになる。

キーワード: 音色・アンサンブル・器楽・探究・聴取

論文集「人と環境」Vol. 12 (2019)

大阪信愛生命環境総合研究所編